

[072] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10195>

出版情報：語文研究. 72, 1991-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

中野三敏編 『緑雨警語』

小説家、又、辛辣極まる文芸批評家として知られる明治の文士齋藤緑雨は、そのアフォリズムに於ても異才の放つ独特の光をきらめかせたが、そんな彼のアフォリズム群八篇、即ち、「眼前口頭」「罪々刺々」「巖下電」「両口一舌」「青眼白頭」「長者短者」「半文銭」「大底小底」を集め、警句それぞれに注を施し、更に、注を施しつつ編者が小声でそっと加えたコメントを付して編まれた一本が、本書『緑雨警語』である。

本書に於て、読者は緑雨アフォリズムの魅力を味わい得る。が、本書より魅力あるものにするのは、施注の簡潔さ・適確さ、それから何よりも、緑雨言とそれに付されるコメントとが触れ合うところに生ずる軽快な、そして大らかな響であろう。

例を挙げてみる。

緑雨醒客曰く「それが何うした。唯この一句に、大方の議論は果てぬべきものなり。政治といはず文学といはず。」これにコメントして「然り、しこうして、それがどうした。」（「眼前口頭」）又、緑雨「高潔を衒はんが為に、漢詩に梅あり、己を欺くものなり。優美を粧はんが為に、和歌に桜あり、他を偽るもの也。猜すらくは現在詩歌の用も、亦この範圍に出でざらんか。」には「詩歌の用といわず、詩歌なるもの、そもそもこの範圍を出でざるべし。」（「半文銭」）

緑雨の口調は敵しいが、その言の依るところは彼の精神の柔軟。そして、その柔軟なる精神を更にやわらかく越えて行く編者のコメ

ント。——かくの如き攻防（？）の八四一戦繰り広げられる中を通り過ぎれば、そこに満ちる空気の実に大らかなるに気付かされる。とかくその悲哀、辛辣を強調されがちの齋藤緑雨だが、本書はそれとは別の緑雨にも目を向けしめる。

尚、緑雨と江戸文化との密接なかわりは夙に言われるところだが、それに関し、本書「解題」で編者は、緑雨にとつての江戸が、元祿でも化政期でもなく、特に、中期の江戸であることを説く。近世文学研究家の鍛えられた眼によりなされるこの指摘は、近代文学研究に携わる者の傾聴すべき指摘である。

（平成三年七月 富山房百科文庫 新書判 二八〇頁 九八〇
巴）

今西祐一郎校注

『通俗伊勢物語』

本書所収の『伊勢物語ひら言葉』（延宝六年跋）、『昔男時世版』（享保十六年刊）の二書は、巷間に流布したとおぼしき『伊勢物語』の俗解書であり、学術的著述ではないが、それだけに却って当時の『伊勢物語』の享受の多彩ぶりを示して興味深い。『ひら言葉』の方は、先行の注釈書や謡曲の詞章をもってなされた注釈書、『時世版』の方は、原典を思い切つて翻案した浮世草子ふうの著作である。しかも、前者は細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』、後者は北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』に、それぞれの行文を依拠していると言ひ、ここにおいて伊勢物語注釈の通時的な系統と、共時的な享受の相貌とが一望のもとに眺められるようになった。

本書の注解の特色は、可能な限り、該書刊行当時流布していた書物を採用していることにある。このことによって、成立の過程に一歩踏みこむことに成功している。たとえば、『ひら言葉』には版本『闕疑抄』の誤りをそのまま踏襲した箇所がいくつもあることを指摘するが、これは作者の知識の水準を示すと同時に、版本の影響力の大きさをあらためて認識させる。また、正統な定家本とは異なる『伊勢物語』本文となっている箇所も、近世初期刊行の『伊勢物語』の注釈書にはま見られる本文であることの指摘など、享受史の横のひろがりを示唆する新見にも富む。

注釈伝授の系統の解明、あるいは注釈者の自筆稿本への遡上などの陰にあつて、これまでのところ個々の注釈書レヴェルでの検討は存分になされてきたとは言いがたい。注釈書をいわば一冊の書物として読むことに徹した本書は、伊勢物語注釈史の研究に新しい展望を与えるのみならず、中古から近世まで時代を問わず、古典の読者を自認する者にとって刺激的な一冊となること、請け合いである。

(平成三年七月 平凡社 東洋文庫535 『通俗伊勢物語』 四〇〇頁 三二〇頁)